内閣府「地域防災における男女共同参画の推進事業」

基調講演

「日ごろの備えと発災後の取り組み」

1995年の「阪神・淡路大震災」が日本の防災減災の元年となり、私たちの防災に対する意識は大きく変化しました。そして、2011年3月「東日本大震災」が起きました。

その教訓から学ぶべく2014年11月28日エセナおおたにおいて、内閣府「地域防災における男女共同参画の推進事業」として、震災現場ではどのような行動をしたのか、仙台市男女共同参画推進センター「エル・パーク仙台」館長、加藤志生子さんに講演をしていただきました。

仙台市男女共同参画推進センター
「エル・パーク仙台」館長

加藤 志生子さん

「エル・パーク仙台」開館時より12年間、同館で相談・施設管理・事業等に携わる。2003年姉妹館の「エル・ソーラ仙台」開館後は、主に図書・講座事業等を担当。3.11当時はエル・ソーラ仙台管理事業係長。
2014年4月より現職

宮城県仙台市の男女共同参画推進センター「エル・パーク仙台」から参りました加藤と申します。

仙台市は宮城県の県庁所在地で人口は106万人、東北地方の中心都市で、太平洋側に海溝があり定期的に大きい地震が来るといわれています。

仙台市男女共同参画推進センターは「エル・パーク仙台」と「エル・ソーラ仙台」の2館で一つのセンターとなっており、一時は、「同じ施設は市内に二つも要らないのではないか?」と見直しの俎上にあげられたことがありました。センターが地域に必要とされるためには「地域課題の掘り起こしの視点が大切」とスタッフは考えました。組織全体として存続の岐路に立たされていた時代は苦しいものでしたが、この時期の「ニーズを汲みとる」という下地があったからこそ、震災後の取り組みに活かすことができました。

3・11 発災直後の状況

発災は、2011年3月11日金曜の午後で、私はエル・ソーラ仙台の28階にいました。日頃から避難訓練、防災訓練を行なっていたので大きな混乱はなく、来館者は職員の誘導で避難することができました。

インフラは全て止まり、一切情報が入ってこなくなったため、津波が起きていることはしばらく知りませんでした。

強い余震が何回も続きましたが、ビルは免震構造のため建物自体の被害は大きくありませんでした。それでも揺れは激しく、床にビス止めされていた低めのパーテーションはビスを引き抜かれて倒れていた所もあり、可動書架も倒れかけていました。

築24年のエル・パーク仙台の入っているビルは倒壊はしなかったものの、6階のスプリンクラーが作動し、センターのある5階まで水浸しになりました。

発災後数日間は、インフラが全て止まり、ガソリンがない、灯油も買えないため、市民生活は大混乱です。地下鉄は一部動きましたが、代行バスには長蛇の列ができました。物流が回復しないため市内でも何も手に入らない状況でした。「物資は3日で届く」といいますが、実際は届きませんでした。移動のおりに「あそこで売り出した」と聞けば、買えるだけ買っていくという日々が続きました。通常の仕事はできないという状況の中、被災者支援活動を始めていきました。

女性の視点を取り入れた支援

3月29日には、「女性の悩み災害時緊急ダイヤル」を開設しました。また、ホームページでの情報提供として